

5576* 上

「奥州八十島、奥州玉造の小野など、今ではどこかわからぬが、とにかく陸奥を舞合はしている」
という。(小野小町追跡「片桐洋一、笠間書院、一三五頁参照」)

あての島 (上落)

光孝天皇の血を引く大切な息子が亡くなり、大江惟章と、小町と、息子の嫁とには、幼い可愛い盛りの女の子が残された。

忘れ形見であるその子は、すでに輝くばかりに美しく、しかも利発きわまりもなかった。先が楽しみな子であった。

然るに今度は、夫大江惟章が病に倒れ、そして亡くなった。

もはや、たのみとする者は誰もいなくなってしまった。涙を押ひて臥して恻惻へ、腸を断ちて起きて喔咿ぶ日々

が続いた。

そんなある日、小町は一人、つぶやいた。

「この子は女の子なのだから、命をねらわれることはないわ。……そうよ。そうなのよ。この娘をこのような鄙の地で育ててはいけないのよ。一刻も早く、小野の里へ連れて行かなければならないのよ」

かつて、母衣通姫が小町を連れて近江国の小野の里を訪

ねたように、——小町も又、孫娘を連れて、近江国の小野

の里を訪ねようと思った。

小町は早速にも、陸奥国に赴任してきていた小野朝臣の

邸宅へと足を運び、相談した。

「それはよい考えです。都にいる小野朝臣への手紙を持っ

てお行きなさるがよい。都でこの子をきつと立派に育てて

くれるでしょう。そしておばあ様らは、近江国の小野の里

でお暮らしになるのがよろしゅうございます」

こうして、小町らは都へと旅立つことになった。

*

陸奥国の小野朝臣は、小町がこの国を去ろうとする時、

別れを惜んでこう言った。

「ぜひにも、歌を一つ所望したいものです。『あてのしま』

という題で、詠んでいただけないでしょうか」

群書類従本『小町集』に、こう記されている。

あてのしまといふ題を

おきの井でみをやくよりもかなしきは

都しまへの別也けり

なお、「おき」は、「おき火」ともい、赤くおこった炭

火、熱い灰などをいう。(古今和歌集「日本古典文学全集、

小学館、四〇八頁、注二参照)

5,591P

247

「沖に浮かんでゐるの島を見る機会は、もう決して無

いでしょう。「おき」(熱い灰)といえ、息子の遺体を

焼いて葬った時の様子がまぎまぎと思ひ起こされます。そ

して、身を焼くよりも悲しいことは、息子らが眠っている

この陸奥国から、**宮様の子ともいふべき名をもつ**都島へ

の別れです」

•なるほど、「ゐてのしま」がどこを指しているのかは？

きりしないが、「おきのゐて」と歌っているのだから、

「沖のゐて」の意であつて、沖に浮かぶ「ゐてという名の

島」のこのように思われる。

•また、「ゐてのしまといふ題を」とあるところを見ると、

誰かが、小町に歌を詠むように勧めたものと解される。

•そしてもしもそうだとすると、「ゐてのしま」は、その

名を聞いただけでどの島のことか理解できるほどによく知

られていたのだから、と想察される。

*

■もつとも、『古今集』墨滅歌、一一〇四には、

おきのゐ みやこしま
小野小町

おきのゐて身を焼くよりもかなしきは

都島辺の別れなりけり

とある。『古今和歌集』日本古典文学全集、小学館、四〇八

そして、この歌の「おきのゐ」・「みやこ島」について、

次のように説示されている。

『大日本地名辞書』(吉田東伍著。一九〇〇(一〇七年刊)に

よれば、陸前(宮城県)の松島・塩釜湾に所在する島名で

あり、「浮島」も含めた「八十島」の名でも小町説話とは

因縁がふかく、奥州(白河関以北の磐城・岩代・陸前・陸中・

陸奥の五ヶ国。今の福島・宮城・岩手・青森の四県)の有名

な歌枕として定着していた。(能因歌枕「八雲御抄」)

という。(「小野小町歌」小林茂美、桜楓社、二八二頁参照)

とすれば、小野小町は、陸前の松島・塩釜湾あたりで

「おきの井で……」の歌を作ったのだからか。

そうかも知れないが、それでは、

〈小町は、おきのゐ(の島)、および都島(という名の島)

を後にして、誰と別れ、どこへ向かったのだからか〉

と不審に思われる。

この物語では採用しない。

■また、因みに述べると、

羽後国九郡の一つである「鮑海郡」(北は由利郡、東は

羽前国最上郡、南は羽前国東田川・西田川二郡、西は日本海)

5,592P

について

「和名抄安久三」と註し、大原・鮑海・屋代・秋田・井手・遊佐・雄彼・日理（由理）・餘戸の九郷を載す。蓋し今の由利郡の南半に亘れり。近世私に割て、南を遊佐郡、北を由利郡といへり。云々」

という。「帝国地名辞典」太田爲三郎、名著出版〈鮑海郡〉。「和名抄」〈出羽国鮑海郡〉参照

つまり、羽後国南端部（現在の山形県北端部）あたりに「井手」という地名があったことが分かる。

とはいえ、この「井手」が、「ゐての島」「沖のゐて」と呼ぶに相応しいところなのかどうか、詳しくは分からない。

「ゐての島」もしくは「おきのゐ」という名の島がどこにあったのかは——今となっては、全く知るすべがない。しかし、仮りにこの物語では、

陸奥国東北部に斗出（長い柄のついたひしゃく状に突出）する下北半島（斗南半島ともいう）の最北端部の山塊が、平安時代前期のこの当時、「ゐての島」または「ゐの島」と呼ばれていたのであろう

と考えてみることにしたい。「帝国地名辞典」太田爲三郎、名著出版〈下北郡〉〈斗南〉。「広辞苑」〈下北半島〉〈斗南半島〉参照

5,593 P

第554

むつ市あたりが平地になっっているので、陸奥湾の南岸から北方を望むと、下北半島最北端部の山塊は海上に浮かんでいるように見える。つまり、「島」のような趣を呈している。

尚、後代の「いとはから」室町時代の永祿の頃、糠部郡の北を割き「海上郡」とし、次いでこれを「北郡」に改めたという。「帝国地名辞典」太田爲三郎、名著出版〈下北郡〉参照

海上に浮かんで見える下北半島最北端部の山塊の中央には、「恐山」があり、——死霊の意中を述べることの由来する「いたこ」（市子・神巫）と称される巫女たちの奇習がある名である。「広辞苑」〈恐山・いたこ・市子・神巫〉参照

■ここにはほんの参考返に述べてみたことがある。

●恐山の「恐」という字の類語（類似的意義をもつ語）に「畏」という字がある。

そして、この「畏」という字は、「ゐ」と発音する。「大字典」土田万年、講談社〈恐〉〈畏〉参照

「恐山、つまり「畏山」のある海上の山塊を、——「ゐの島」もしくは「ゐての島」と呼んだとしても、不自然ではなさそうに思われる。

●また、「ゐて」と「いた（こ）」とは、かなり似ていると

第554 図、写真図形 B1/a B1/b 城山

5594 P

249

5578 P

5,594 P

・カラー
右頁の上半分は
大きくはみ出して
掲載下さい!!



1304
『地図でめぐる神社とお寺』
1404 第554回
お神社をめぐると
恐山鳥瞰図
武光誠
帝国書院 平成24年7月12日発行 23頁参照 250P

5,595P

カット

カッ
ト

カッ
ト

・カラー
・右頁の下半分に
大きく掲載下り



¹⁴⁰⁹ **地獄** 写真図版 812 ^{お釈迦さん} 恐山の**地獄**
硫黄の臭いが立ち込める荒々しい岩場。風車がカラカラと乾いた音を
たてる荒涼とした風景が広がる。

1306


『地図でめぐる神社とお寺』武光誠 帝国書院 平成24年7月12日発行 2頁参照

カット ←

5,596 P

カラー

左頁の下半分に
大きく載せて
下さい。

	恐山 鳥瞰図
	恐山の地獄



1409 写真図版 813 ^{おそりやま} 恐山の ^{うそりやま} 宇曾利山湖 (^{ごくらくはま} 極楽浜)

1209 宇曾利山湖は、強酸性のカルデラ湖。白砂の浜辺に点在する死者供養の石仏や積み石が独特の光景を見せる。

1309

『地図でめぐる神社とお寺』 ^{たけみくまこ} 武光誠 帝国書院 平成24年7月12日発行 22頁参照 252

いえよう。

例えば、手という字は、「て」とも「た」とも訓める。

(手紙・手折る等)

「ゐての島」の巫女だから、「ゐて(こ)」、「ゐた(こ)」

と呼んだのであろうか、などとも想像されるが定かでない。

なお、東北地方には、「どじょっこ」「ふなっこ」「隅っこ」

「手こ」「唄こ」「姉こ」などと、何にでも「こ」をつける

風習があってよく知られている。

■もしかしたら、平安朝当時、以下 第553回 図参照

●『ゐての島』(ゐの島)は、「下北半島最北端部の山塊」。

●『玉造り江』は、ちよつといびつな、造りかけの勾玉の

ような形をしている入り江「陸奥湾」。(群書類従本「小町

集」三七番歌〈みちのくの玉造り江にこぐ舟のほにこそ出でね

君を恋ふれど〉参照)

●『玉造の小野』は、「陸奥湾近傍の小野」。

●『八十島』は、陸奥湾南岸から北へ向かって突出する

「夏泊崎」の西岸沿いに点在している小さな島々、

このことを指していたのではなからうかとも思われるが、い

うまでもなく詳らかでない。

*尚、八甲田山(二五八四呎)の山頂から、北の方角眼下

に、美しい勾玉状の「陸奥湾」を一望できる。

5,597P

253

■さらに因みに述べると、

「恐山霊場の本殿である地蔵堂は、清和天皇の貞観四年

(八六二)、慈覚大師(七九四〜八六四)によって建立され

たと言ひ伝えられている」

という。(青森県の歴史「宮崎道生、山川出版社、四七〜四

八頁参照)

*

■「ゐての島」を題として歌を詠むように勧められ、

『おきのゐて』という発句が心に浮かんだ途端、...

小町は、死んでしまった息子を思い出したのだから。

「あなたを陸奥国に残して行くのは、身を焼くよりも悲し

いことです)

悲しいという言葉の奥、切り焼くような苦悶が伝わっ

てくる歌である。

■一方、『都しま』は、「都」のことであって、「平安京」

を指しているのだからと思われる。

「島」は、国または一地方の意であり、万巻三二五五の

柿本人麿の歌、

天離る美の長道ゆ恋ひ来れば

明石の門より大和島見ゆ

等の例がある。(「萬葉集事典」佐々木信綱、平凡社、五四七

頁〈やまとしま〉参照

つまり小町は、「ゐてのしま」という題で歌を詠んでほ
しいと言われた時、「ゐて」と「しま」との二つに切り離

おきの井でみをやくよりもかなしきは

都しまへの別也けり

と歌ったように理解される。

「悲しいけれども、都へ行かなければならないのよ。あな

たは帝の皇子なのですもの、きつと分かって下さるわね。

……もう、おそろくここへ帰って来ることはなく、お墓参

りさえ出来ないでしようが、どうかこの陸奥国から、あな

たの娘の無事を見守っていてやって下さい

小町の歌を聞いた者たちも、皆、涙したことをさう。

*

ところが、この「別れを悲しむ歌」は、後代になって、

——違った意味に解釈されることとなってしまったように

ある。

■先に述べたように、『古今集』墨滅歌、巻第十、物名部、

一一〇四には、こう記されている。

おきのゐ みやこしま

小野小町

おきのゐて身を焼くよりもかなしきは

5,598P

254

都島辺の別れなりけり

「真つ赤に燃える情熱によって身が焼かれる思いをするよ
りももっと悲しいのは、都と遠い島とに引き離される別れ
だったのです」(古今和歌集「日本古典文学全集、小学館、

四〇八頁)

■そしてまた、『伊勢物語』第一一五段には、こう述べら

れている。

むかし、陸奥の国にて、おとこ女すみけり。おとこ、

「宮こへいなん」といふ。この女いとかなしうて、馬のは

なむけをだにせむとて、おきのゐて、都島といふ所にて、

酒飲ませてよめる。

をきのゐて身をやくよりもかなしきは

宮こしまへの別れなりけり

「おきのゐて、都島」は所在不明ながらも、陸奥国(奥羽

地方)の地名だということになっている。(小野小町追跡「

片桐洋一、笠間書院、三二―三三頁参照)

なお、『伊勢物語』は在原業平によって作られた、とす

る説がすでに平安朝末から存在しているにしても、——そ

の全てが業平によって書かれたわけではなさそうである。

(竹取物語・伊勢物語・大和物語「日本古典文学大系、岩波書

店、八一―八九頁参照)

世きでら
関奇

小町の孫の歌

陸奥国を後にした小町らは、先ず、都の小野朝臣の邸宅を訪ねた。...

かつて、光孝天皇の寵愛を一身に受けていた小町のおかげで、小野氏一族は華やかな榮譽を蒙ったのだった。

そうした小町の誓が忘れられるはずはなかった。都の小野朝臣は、礼を尽くして小町らを迎え、喜んで孫

娘を引き取ったことである。だが、小町の孫娘に厳しく礼儀作法や学問などを習得さ

せる為にも、小町らがその子と一緒に暮らす訳にはい

かなかった。愛情を注いで育ててきた幼くあどけない子を手放した小

町らは、気抜けしたようにさまよい歩き、...やがて、近

江国の小野の里へやってきたように思われる。なお、小町の孫娘の母(つまり光孝天皇の孫娘の母)は、

小野の里で大事にされたに相異ない。しかし小町は、尼になって、近江国関寺(天津市関寺町

の長安寺の別称で、もと三井寺の一坊)あたりに住んだ、と解される。(広辞苑<関寺>参照)

先にも述べた『愚見抄』および『鴉路鳥物語』には、伊勢物語

5599

鴉路鳥物語(鴉路鳥合戦物語)には

こう記されている。

①「小野小町、大江惟章が妻になりて下りけるが、後尼になりて、近江国関寺のあたりにありける」(愚見抄)

「つくばの人の心を悩ましていへども、衰へぬれば、鄙にさすらひ、都にさまよひ、はては関寺の辺に庵を結びて、

野辺の若草に命を支へ、憂き居住をせしを、智證大師御覽じまして、寺にて七日の御説法ありとて召されしに、

身の有様を恥ぢて参らざりし時、御使度々なりしかば、召す事はおののけばやどわびけんも、誠に衰れに覺えたり」

とある。(鴉路鳥物語) 実物は、どの巻に、

が あった よう である。小町の孫のことは、『後撰和歌集』巻第十八(二六七

に見られ、——「こまちがむまご」とある。すなわち、自身の名は伏せられており、有名歌人である

小町の孫として記されている。なお、本居内遠(江戸後期の国学者、一七九二(一八五五)

は、『小野小町考』の中で、「小町がうまごの歌見えたれども、系図に載せず。うまご

「小町がうまごの歌見えたれども、系図に載せず。うまご

XIV
ごらんじまして H25.12.14
千エック: 同文 5569 5570
「助詞」 助詞
「ば」として結合「ば」
「お」の後

とある可
(稿寫物語)

たり
 おののけはやとわびけ人も
 誠大哀れに覚え
 らざりし時
 御使度々なり
 身の有様を取て
 法ありとて召さし
 身の有様を取て
 智證大師御覧ま
 野の辺の若草に命を
 都にさまよひて
 ばく都を離れ土地
 人の心を悩まし
 小野小町は若く
 盛りなりし時
 終はしか
 衰へぬ水

20年と
 「くは」
 大子
 幾度と
 256
 5510 P 759

大野 貞子

舞に乗る (舞に乗る) 舞に乗る

うたげ 酒宴さかか 人歌舞などけ舞は 花の舞 舞

舞乗小町 貞子 貞子

5,601 P 貞子小町 2頁左

舞乗小町 貞子 貞子

舞乗小町 貞子 貞子

小野小町 264の後

1725.12.3

ろめく足さふみーめて、懸命に舞い興ずるの
 小町は杖を頼りに一なから百とせのよ
 に乗い、若いのろの五節の舞を唄んで舞った。
 が舞を舞う様子を見て、小町は、自分も興
 関寺での宴半は、七夕の祭りに稚見たち
 と共に、今の落魄(零落)の身を歎いた。
 小野小町は、若い頃の華やかな生活を語る
 そこの僧はこの老女が小町であることを知る。
 小町は「聞けは涙の故郷の又思わゆる悲しき」と涙に咽んだ。
 老女は、問われるままに色々(いろい)と和歌の吐きした
 たいと思いで、稚見たちを連れ、山陰の庵
 へ参照(さんしやう)した。
 近江国関寺の僧が、七七夕祭(しちしやうさい)の日に、
 歌道の達人と云われている老女の物語を聞き
 通りである。
 関寺小町の構想は、概略(がいりやく)次の

【能】
 関寺小町
 【能】

関寺小町の構想は、概略次の

コクヨ ケ-20 20x20

貞子2頁右 2行~ 貞子12頁右 2行~

257

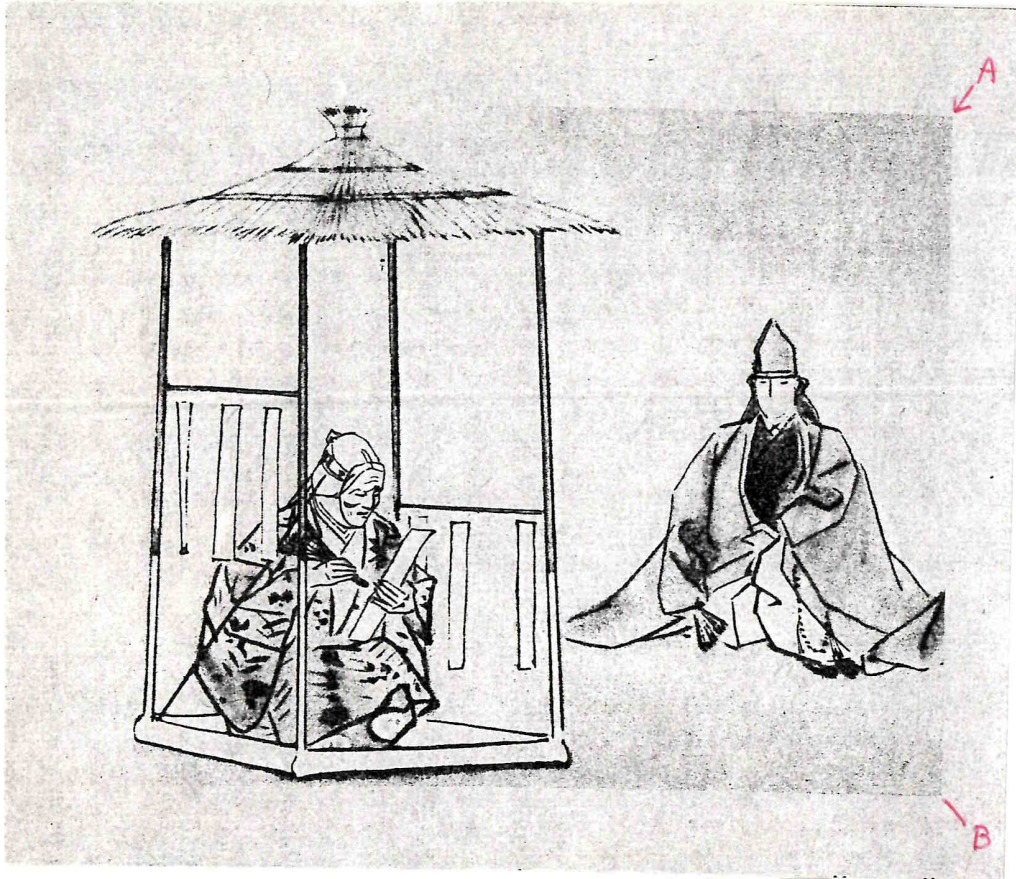
舞乗小町 貞子 貞子

257

舞乗小町 貞子 貞子

頁の上半分に、限度一杯大きく ^{左右に} 挿入して 配置ください。

5,602 P-



第555図 [能] 『^{せきでらこまち}関寺小町』の一場面

『^{くわんせいきん}関寺小町』観世左近 ^{せきでらこまち} 檜書店、昭和62年8月25日発行、2~3頁参照。

※ 著作権
許諾を
もらって
下さい。

お願い。*左端は、^{いかり}庵の中にある小野小町の様子を示す。

- AとA'、BとB'を突き合わせて、一枚の写真にしてください。
- 突き合わせた縦線が、分からないようにお願いします。

関寺13頁右5行

大目本坊で水ない

女婢 大カシ 576
セシ
娟 大カシ 555
三

大カシ 1644
大カシ 漢
大カシ 漢
大カシ 漢
大カシ 漢

5,603 P

だ
っ
た。

も
と
よ
り、
穴
幼
窈
（
美
く
た
お
や
か
な
さ
ま
）
の
美
ひ

嬋
娟
（
顔
や
姿
の
美
く
あ
で
や
か
な
さ
ま
）
の
美
ひ

は
あ
す
で
に
去
っ
て、
あ
さ
ま
ま
い
た
ま
い
く、
目
め

も
あ
た
ら
ぬ
有
様
は
あ
る
が、
か
し、
彼
女
の

舞
ハ
姿
に
は
下
昔
を
思
は
せ
る
妖
艶
華
震
な
白

か
漂
っ
て
い
た。

然
る
程
に
（
さ
て
）
初
秋
の
短
夜
は
や
明
ろ

の
関
寺
の
鐘
鳥
も
頻
り
に
告
げ
渡
る

杖
に
継
り
て
よ
ろ
よ
ろ
と
下
も
と
の
菓
屋
に
帰
り

け
り
石
云
々

と
い
つ
た
筋
書
き
で
あ
る

左
近、
檜
書
店
々
昭
和
六
十
二
年
八
月
二
十
五
日
癸

行
参
照

関
寺
で
の
七
夕
の
祭
り
の
後

星
祭
り
の
時
の
様
子

だ
れ
か
か
下

5,605^P あはれちやう

夏木きの 「小野小町」 274^P
下/23行
いさや川「小野小町」 269^P上

トル

<p>小野は歌った。</p>	<p>トル 私<small>わたし</small>は、そんなにも、あはれに思<small>おも</small>えるのが</p>	<p>ような感<small>かん</small>さえあった。 と、い、うた、め、わ、ざ、め、が、都<small>みやこ</small>からや、つ、来<small>き</small>るかの</p>	<p>い、や、</p>	<p>野小町のことを、あはれだとい、う。 ■ 全<small>まった</small>く悪<small>あく</small>意<small>い</small>は無<small>な</small>いのであ、う、が、皆<small>みな</small>が皆<small>みな</small>、小</p>	<p>(水) 姓<small>な</small>省略</p>	<p>苑<small>ゑん</small>、陸奥<small>みちのく</small>、(ミ、ク、ノ、オ、ク、の、省、略) (参、照)</p>	<p>と、い、つ、た、竟<small>まさ</small>味<small>あじ</small>な、の、で、は、な、か、ろ、う、か、(「、広、辞、</p>	<p>私<small>わたし</small>は、秀<small>ひで</small>、四<small>よ</small>、に、そ、出<small>で</small>、さ、な、い、の、で、す。君<small>きみ</small>を、恋<small>こ</small>、</p>	<p>の、日<small>ひ</small>、帆<small>ほ</small>、目<small>め</small>、に、た、か、下<small>くだ</small>、</p>	<p>陸奥<small>みちのく</small>の、玉<small>たま</small>、造<small>つく</small>、り、江<small>え</small>、(陸奥湾<small>みちのく</small>)、に、浮<small>う</small>、か、ん、で、漕<small>こ</small>、</p>	<p>(陸奥)へ、逃<small>に</small>、げ、れ、住<small>す</small>、ん、で、い、た、こ、う、</p>	<p>13.5^{PM} 帝<small>みかど</small>の、御<small>おん</small>、言<small>ことば</small>、葉<small>は</small>、に、従<small>したが</small>、っ、て、遠<small>とほ</small>、い、</p>	<p>「秀<small>ひで</small>、乃<small>の</small>、に、出<small>い</small>、づ、と、い、う、の、序<small>しり</small>、と、な、つ、て、い、い、る、。</p>
----------------	---	---	-------------	--	------------------------------------	---	--	---	--	---	---	--	---

小野小町 269^P
いさや川
いさよき
いさよき

小野小町 274^P
梓すず、一いち
未ま、一いち
にかい
助詞

姓な 陸奥 = ミ、ク、ノ、オ、ク、の、

あはれてふ 言の葉ごとくに 置く露は
 昔を恋ふる 涙なりけり

(「古今集」卷第十八 940番歌。群書類従「小町集」)

大勢の人達がかけてくれる日 あはれは
 と言葉を聞きたびごとくに、目に浮か
 ぶ露は、昔を恋ひ慕う涙なのです
 と言葉を置きた見立てたので、「置く露は
 といつたためである。

古今集のこの歌に続く小野小町の歌を
 載せておくこととしよう。(以下、古今和歌
 集 小野小町館 昭和六十二年十二月第十版発行 三五三―四頁参照)

(941) 世の中の憂きものは 告げなく
 まづ知るものは 涙なりけり

私はこの世の憂きもの 告げてやつた
 覚えはなりのだけれど、涙というものは、
 真つ先に水を知るとみえて、事があれば

すべに流れ出てくる
 世の中は、夢かうつつか
 うつつとも、夢とも知らず

ありてなければ
 この世は、夢なのか、それとも現実なのか
 13.5cm 字下げ

どちらともはつきりない
 どうせへ有れ

木たのいも無きか
 絶妙である。(「小野小町追跡」片桐洋一)

来たるのでしよ

来 り う の に 下 そ 水 に う し て 気 が 付 か な か つ	来 て 、 任 す も う と 思 え は 任 め る 世 の 中 だ つ た と	13.5 ^{GM} 〔白雲〕 任す か い つ も た な ひ 任 め る 山 の 上 に だ つ	(945) であ る。 白雲の 絶え ず た な む く 峰 に だ つ	日 部 の 地 に 居 る こ と を 喜 ん で い る 歌	※ この歌 以下は 世の煩 わら し さ を の か れ 下	来 心 地 か よ い 〓 煩 ら わ し 俗 世 間 よ り は 、 住 み	13.5 ^{GM} 〔山里〕 世の夏 き よ り は 、 心 細 い こ と は あ る か	(944) 山 里 は も の の わ び 一 き こ と こ そ あ れ	来 は 水 ら と 言 う や だ と 言 う べ き か 〓	来 無 し と 言 う こ と だ そ う い う 世 の 中 を い あ	13.5 ^{GM} 〔我わ〕 あ は れ と 言 は む あ な 夏 と 言 は む 〓	(943) 世 の 中 に い づ ら わ か 身 の あ り て な し	米 な お こ の 句 の 主 語 は 「 世 の 中 」 で あ る
---	---	--	--	--	---	--	---	--	--	---	---	--	--

山野小町は「当初の間こそ気を狭い」
わざ出向りて来る者達と程々のおつきあいま

訪れる人が多くなり「やかて嫌気がさしたの
おとす

ではなかろうか

私には「そんなにも口あわれみに見えるの

かしら

・小野小町は「世の煩めしさを厭い旅に出た
たような印象を受ける。

小野小町 306P
3行へ

小野小町 304頁

七国神社
小野小町 118P 4行
41行 小野小町
269頁上

5,609P 小野小町 267頁下

117のことだったのだから 4頁後7行
909 69才
841
58 68
小野小町 268頁下へ
挿入する

い、 比里 に 両親 の塔 を築 き、 夫よ り 国々 所々	で、 神詠 （神が よんだ と） う 和歌 を 感 に 王	小野里 小町略 縁起 に、 こう 記さ れて いる。	七国 神社の 縁起 に、 肥後 国山本 郡正院 郷	へ小町の 享年に ついて の項に おいて 考察し	六十九歳 で尼と なり、 関寺 に庵を 結んで 住す	醍醐 天皇の 延喜 九年 （九〇九） 下 小町が	の 小野の 里へ戻 つて きた こと があ った よう	小町、 故郷へ 帰る
--	---	---	--	---	--	--	---	------------------

次頁から

上字アキ

5,610^P

大カノ471°, 1588
塔吳漢 石吳漢
トヲフ セキ

⑤600^P3行

92オ⑤668^P上末

小野 関寺 264^P

亀喜 (一九七四)

とらう (鹿本郡誌) 編者鹿本郡長 高田

この小野で、小町が生まれた。そのとき、
中央の竹藪の中に、良実の墓がある。山東
村小野の山麓にあり、塔石五つてはなは
だ古く、仏像を刻せるにや。銘文等消滅
して不明。里俗、小野良実の墓なりと云

改行

後国

山本

(郡)

へ流罪

になつた。

そのとき

出羽郡司であつた良実が、讒言により肥

肥後国、小野の里に、小野良実の墓と称

とある(第九十五章) 小野(末尾)の追加資料参照
* たぶん、小野氏一族の若者が、旅の御供をしたのであろう
* ともいえる。第九十五章(関寺)の項参照

御齡九十二歳也

供養をした後のことだろうか。関寺に(帰り)至

経廻(経回り歩くこと)し、八十鳥へも行

小野大野史

小野史 258-257上末

二人(息子と) 大江惟章の

田川氏かたたび七国神社へ来た。(欠番 5,614 ~ 5,617)
 5623 下野 因みに世八りと 5607 15行 5,613

1941年生
 手紙の
 著者が
 12才の時
 川学校6年
 6.26の晩
 1953年

た。つて流失し、周囲の景観も一変してしまっ
 た。翌年、小町堂近くの日七国神社は境内に新
 しい小町像を安置したものの、一一一この伝承
 は復活しなかった。
 長年の信仰の対象であった小町像および小町堂
 の流失ということが、伝説の芽を摘み取った
 ともいえる。 (「小町伝説」明川忠夫、現代創造
 といふ。)

社、昭和六十二年十一月十八日発行、一三九
 一四一頁参照)

なお、江戸時代当時の七国神社前の日小野泉水
 で、和歌の会がしばしば開かれた。 (明川忠夫、
 といふ。)

「小町伝説」を歩く。 (明川忠夫、(株)初
 文庫、平成十五年四月二十八日発行、一九
 五頁で第九十五章末尾の追加資料参照)

☆
 5655 ~

HV

小町の孫の歌

陸奥国を後にした小町らは、先ず、都の小野朝臣の邸宅を訪ねたことであつたらうか。

かつて、光孝天皇の寵愛を一身に受けていた小町のおかげで、小野氏一族は華やかな榮譽を蒙つたのだつた。

そうした小町の訃が忘れられるはずはなかつた。

都の小野朝臣は、礼を尽くして小町らを迎え、喜んで孫娘を引き取つたことであらう。

だが、小町の孫娘に厳しく礼儀作法や学問などを習得させる為にも、小町らがその子と一緒に暮らす訳にはい

かなかつた。

愛情を注いで育ててきた幼くあどけない子を手放した小町らは、気抜けしたようにさまよい歩き、…：やがて、近

江国の小野の里へとやってきたように思われる。

なお、小町の孫娘の母（つまり光孝天皇の孫娘の母）は、小野の里で大事にされたに相異ない。

しかし小町は、尼になって、近江国関寺（天津市関寺町の長安寺の別称で、もと三井寺の一坊）あたりに住んだ、と

解される。（『広辞苑』関寺〈参照〉）

先にも述べたように、『愚見抄』および『鴉鷲記』には、

こう記されている。

「小野小町、大江惟章が妻になりて下りけるが、後尼になり

りて、近江国関寺のあたりにありける」(『愚見抄』)

「つくばの人の心を悩ましといへども、衰へぬれば、鄙に

さすらひ、都にさまよひ、はては関寺の辺に庵を結びて、

野辺の若草に命を支へ、憂き居住をせしを、智證大師御覽

じましまして、寺にて七日の御説法ありとて召されしに、

身の有様を恥ぢて参らざりし時、御使度々なりしかば、召

す事はおのけばやとわびけんも、誠に哀れに覺えたり」

(鴉鷲記)

とある。

小町の孫の歌

ともあれ、これまで述べてきたように、小野小町には孫

があつたようである。

小町の孫のことは、『後撰和歌集』巻第十八（二二六七

に見られ、——「こまちがむまご」とある。

すなわち、自身の名は伏せられており、有名歌人である

小町の孫として記されている。

●なお、本居内遠（江戸後期の国学者、一七九二—一八五五）

は、『小野小町考』の中で、

「小町がうまごの歌見えたれども、糸図に載せず。うまご

5.6.8 P

ニの本 254頁 (同頁)

あれば、小町も子有りし事しらる「大江帷章」の血筋を引いていなかっただから、その名が伏

と述べている。江戸中期の山岡俊明の編、前田善子 2021 里岩派香 24

「小町が孫といへるも有り。世には小町は女の交らひも知らぬかたはのごとくいども、さにはあらざるなり。まさしく子孫の有るを思ふべし」

とある。54891 549

●そして、橋本直香（江戸末期から明治にかけての国学者。歌人、一八〇七〜一八九九）の『歌仙部類抄』女房部には、「孫あれば子あり、子あれば夫ありて、云々」

と記されている。（「小野小町」前田善子、三省堂、二〇二頁。娘おき）多情との噂が立ち、言い騒がれていた頃、ある男（小町の孫の相手である男である）が入つてにはほかに聞き、「小野小町論」黒岩派香、朝報社、二四頁。第九十五章「小町塚」と「宮内省管轄下の小町塚」について（の項参照）

それでは、小野小町は、一体誰の子をもうけたのだらうか。

「四のみこ」・「在原業平」・「大江帷章」のうちの誰かと、小町との間に子供ができたのであろうか。

いやいや、小町の子の詳細を述べることはできず、小町の孫の姓を記すわけにもいかない、何か大きな理由があつたように思われる。

たぶん小町の孫は、「四のみこ」や、「在原業平」や、

5,619 P

「大江帷章」の血筋を引いていなかっただから、その名が伏せられているのであろう。

さて、『後撰和歌集』巻第十八〜二六七には、次のように記されている。

あだなる名たちて言ひ騒がれける頃、ある男ほのかに聞きて、あはれいかにぞととひ侍ければ

小町が孫

うき事をしのふる雨のしたにして

わがぬれぎぬはほせどかはかず

多情との噂が立ち、言い騒がれていた頃、ある男（小町の孫の相手である男である）が入つてにはほかに聞き、「おそらく文を届けて」「哀れ、いかにぞ」と問い給うたそ

の返事として、…小町の孫はこの歌を詠んだ

と解される。

とかく、世間の人は妬ましく思つて、あらぬ噂を立てたり、中傷したりする。

「まあ、一体どういうおつもりなのでしょうね」

「そうよ。許されることではないわ」

そうした激しい批判の言葉が、二人の仲を引き離し、逢うに逢えない状況に追いやっていたのかも知れない。

泥の縁、孤狸地

272

なお、「憂き」に雨の縁で「泥」を響かせ、「忍ぶ」に雨の「しの降る」を掛け、「雨の下」に「天の下」を掛け、「ぬれぎぬ」(濡れた着物)に「ぬれぎぬ」(無実の罪)を掛けている。(後撰和歌集「工藤重矩校注、和泉書院、二七四頁参照)

「いやなことを耐えている此の天の下では、私の無実の罪は晴れることがありませんし、私の濡れた衣はほしても乾きそうもありません。私は毎日、泣きくらししております」小町の孫にとって、この天の下は、どんなにつらいことであつたらうか。

そうした和歌を作つた後、…その孫娘が小町を訪ねてきて、つい、世間の目の冷たいことをほのめかしたのである。

小町は泣いた。
群書類従本『小町集』には、

徒名(色好みうわき)に人のさはがしう言ひ笑ひける頃、言はれける人(小町の孫娘のことである)の問ひたりけるかへりごとに

うきことを忍ぶる雨のしたにして
我ぬれ衣はほせどかはかず

5,620^p

とある。

つまり、小町は、孫の歌と全く同じ歌を詠んだのかも知れない。

もつとも、もしかしたら小町は、孫の歌を少しばかり変えて、次のように歌つたのだろうか、とも思われる。

憂きことをしのぶるあめの下にしく。
我が濡れごろもほせど乾かず

尚この歌は、『小野小町論』黒岩涙香、朝報社、三九頁に記載されているが、本来の出所について探し得ないので、参考迄に付記するにとどめたい。

いづれにせよ、—孫の悲しみは、小町の悲しみでもあつたに違いない。
涙で濡れた衣は、乾く間もなく、新たな涙で濡れたのであろう。

ところで、もしも小町が孫娘の境遇を悲しんで歌を作つたとすれば、…その時小町は、かなりの年齢であつたらうと思われる。

そのようなことが、有り得るのだろうか。
そこでここに、小町の享年について考察してみよう。

前田壽子 35-2^p 11-無い。

小町の享年について

小野小町は、長命だったようである。

①「光孝天皇の仁和（八五〇八八）の頃まで生きていた」とか、「宇多天皇の寛平（八八九八八九）の頃まで存えて居たらしい」とか、歌人達は云う。（小野小町論「黒

岩淚香、朝報社、四六頁参照）

②光廣卿『百人一首抄』・『冷泉家記』等を證として、「小町井手寺に於て六十九才にて死亡」という説が、『塩尻』・

『扶桑故事要略』・『青栗園隨筆』等にあげられている。

（小野小町「前田善子、三省堂、一五三頁参照）

③さらに、『和歌極秘伝抄』・『百人一首師説抄』には、（平城天皇の）大同四年（八〇九）に生まれ、（醍醐天皇の）昌泰三年（九〇〇）に九十二歳で死すとある。

これは、『伊勢物語知頭抄』に見える「（陽成天皇の）元慶元年（八七七）に小町六十九歳であつた」とい説と一致している。

●そして、この六十九歳という年については、先に述べた光廣卿の六十九歳死亡説とも関連があるらしく思われるが、根拠というべき文献は他に見当たらない。（小野小町「前田善子、三省堂、一五三頁参照）

5,621^P

以下のように考えてみたい。

■小町は、承和八年（八四一）に生まれた。（小町一歳）

■小町は、宇多天皇の仁和四年（八八八）一月か二月に男に

眼を生んだ。（小町四十八歳。男児一歳）

■醍醐天皇の延喜四年（九〇四）、男児が十七歳の時に女

児をもうけたと仮定しよう。（小町六十四歳。男児十七歳。

孫娘一歳）

■それから間もない頃小町の息子が傷ついで亡くなり、引

き続いて夫大江惟尊も病死した。

■小町は、孫娘を都の小野朝臣に託した。

■そして醍醐天皇の延喜九年（九〇九）、小町は六十九歳

でこの世を捨てて尼になつたのではなからうか。（小町六

十九歳。孫娘六歳）

■多感な年齢となつた小町の孫娘が、

うき事をしのふる雨のしたにして

わがぬれぎぬはほせどかはかず

の歌を詠んだのは十五歳の時。つまり醍醐天皇の延喜十八

年（九一八）のことであつたと想定してみよう。（小町七十

八歳。孫娘十五歳）

*

918 15
909 6
904 5 14

909 69
841 1
68

904 17
888 16

918 78
904 48
888 48
841 48
467 48
467 48

832 42
841 1
91 91
932 29 1
904 28
26

■尼になった小町は、近江国関寺（天津市関寺町）辺に庵

を結んで憂き住居していたのであろう。

しかしその後、小町は、——故あって井手寺（山城国

綴喜郡井提の里）へ移り、朱雀天皇の承平二年（九三二）

に九十二歳で亡くなったのかも知れない。（小町九十二歳。

孫娘二十九歳）

ともあれ、小町はずい分と長命を保ったようである。

小町死亡の場所は、伝説として有名なのは奥州八十島で

あり、また逢坂ともいうが、——やはり、「井手寺」の方

が穩当なようである、という。（「小野小町」前田善子、三省

堂、一五三頁参照）

*
なお、先にふれたように、——醍醐天皇の昌泰三年（九

〇〇）に九十二歳、陽成天皇の元慶元年（八七七）に六十

九歳であったとすると、なるほど小町は平城天皇の大同四

年（八〇九）に生まれた勘定になる。

しかしながら、もしもそうだとすると、

〈小野篁の孫が小町である〉

とは到底考えられなくなる。

篁は延暦二十一年（八〇二）の生まれだから、篁が八歳

の時に孫娘小町が生まれたことになってしまっからである。

809 8
808 1
5,622 P

どこかに齟齬があるのだろう。

小町の孫の歌が、他にないだろうか

『後撰和歌集』は、

うき事をしのふる雨のしたにして

わがぬれぎぬはほせどかはかず

を、「小町の孫の歌である」という。（既述）

もしも小町の孫に、小町の歌とも見紛うばかりの優れた

歌を詠む歌才があったとすれば、……小町の孫は、恐らく

他にも多くの秀歌を詠んだことだろう。

もしかしたら、『古今集』、その他の歌集等に、小町の孫

の歌が、密かに、そっと掲載されているかも知れない。

とりとめもない漠としたことながら、

《小町の孫が作ったのではなからうか》

と思われる歌を、探してみよう。

近江の采女

それが、どの天皇の御代のことであつたのかは詳らか

ない。

ある天皇が、近江の采女に歌を作ってお与えになつた。

『古今集』墨滅歌卷十三一一〇八にこう記されている。

ており、
 「さあ知らない、と仰言い。決して私の名を仰言いますな」と仰言い。
 という意味である。『宇真図版』761、762、鳥籠山(参考)
 なお、「イサ」といえば、紀貫之の歌、
 人はいさ心もしらずふるさとは
 花ぞむかしの香にほひける
 (昔なじみの初瀬の里で、梅の花は昔のままに良い香りを
 はなつて美しく咲いているが、そこに住んでいるあなたの
 心は、さあどうだろうか。(どうやら心がわりしたようです

犬上の鳥籠の山なる名取川
 いさと答へよわが名渡らすな
 この歌、ある人、天の帝の近江の采女に賜へると
 (近江国) 犬上の鳥籠の山の麓を流れるのは、... 不知
 世川とは答えないで「さあ知らない、何という川かしら」
 とでも答えて下さい。そして、私のことを尋ねられたなら
 ば、「さあ知らない」と答えて、名を伏せ、決して私の名
 を漏らしてはなりません
 この歌の原歌は、『万葉集』卷十一一七二〇
 犬上の鳥籠の山にある不知世川
 不知とを聞こせわが名告らすな
 である。不知世川までが、イサ(さあ知らない)の序となっ

275

第540図

長谷寺境内図の登廊わきに「貫之梅」がある
 ね)

が広く知られている。(小倉百人一首「三十五番歌。『古今集』

巻一四二、第一図(紀貫之)参照

*「イサ」は、「知らず」を伴うことよって、「さあ、ど

うだろうか」といった気持を表わすという。(広辞苑)「イ

サ(参照)

天皇は、言うまでもなく、近江国犬上の鳥籠の山の

麓を流れる川は「不知世川」、陸前国(宮城県)名取郡の

川が「名取川」であることを熟知しておられたに違いない。

あえて知らない風を装い、第三句を「名取川」とし、第

五句の「名」に掛けてあるように解される。

天皇からこの歌を贈られた近江の采女は、次の返歌を奉

た。(古今集)墨滅歌卷十三一一〇九

返し 采女の奉れる

山科の音羽の滝の音にだに

人の知るべくわが恋ひめやも

「山科の「音羽の滝」は知られていますが、私は音(単な

る評判、うわさ)さえもたえず、他人に知られるような恋

はいたしません)

(1)因みに述べると

「山科は、もと山城国宇治郡北方過半の称にして、今の山

1/4

5630上

山科の音羽の山

空惚け

知27, いろそと、知56(ハカ)をた。

275, 135, 135, 24行

・カラー。右頁の上半分に、大きくはみ出して掲載。5.624P 4.30

小野小町
221P下
1097

紀貫之
平安前期の
歌人。
醍醐天皇
に仕えた。



1304

1424

第556図

きのつらゆき
紀貫之

あがたみほろ
（上ヶ壘本三十六歌仙繪）

『日本繪卷物全集』角川書店
11頁に、ローマ字のルビがある
「Agedatami
上ヶ壘」

『日本繪卷物全集』三十六歌仙繪、角川書店、昭和42年12月30日発行、38頁参照

276

手持ちの

『百人一首』学習研究社 75頁にもある。カラー